

走れメロス（太宰治）

梶原 悠平、川村 亮介、中寫 一貴、村井 隆人



一 作者と作品について

太宰治（一九〇九～一九四八年）は、本名を津島修治といい、一九三三年より小説の発表を始めた。一九三五年に「逆行」が第一回芥川賞候補となった。主な作品に「走れメロス」「津軽」「お伽草紙」「斜陽」「人間失格」などがある。諧謔的な作風で、坂口安吾や石川淳とともに新戯作派、無頼派と呼ばれた。自殺未遂を繰り返し、最期も一九四八年に玉川上水にて入水自殺を行った。

「走れメロス」は、昭和十五年五月号の「新潮」に発表された。初版本は河出書房『女の決闘』で、その後新潮社『富嶽百景』、文芸春秋新社『水仙』に再録された。「走れメロス」は、フリードリヒ・シラーの「人質」を原作としている。

二 叙述について

メロスは激怒した。

何に怒っているのか、この時点では、わからない。時間が前後している。

必ず、かの邪智暴虐の王を除かなければならぬと決意した。

「除く」に、邪魔者などを排除・排斥するという意味があるので、メロスは王を殺したいと思っている。後に「生かして置けぬ」と発言していることからわかる。

けれども邪悪に対しては、人一倍に敏感であった。

「人一倍に」とあるので、のんびりとした生活を営んできたメロスであるが、悪を察知することに関しては、人よりも長けていたことがわかる。正義感溢れる、メロスの人柄が表されている。

久しく逢わなかったのだから、訪ねていくのが楽しみである。

親友・セリヌンティウスに久しぶりに会う、メロスの気分が高まっている様子が、想像できる。

歩いているうちにメロスは、町の様子を怪しく思った。

これまでの物語の流れが一変する。「怪しく思った」のであるから、この後、事態は悪い方向に向かう可能性が高い。

老爺は、辺りをはばかりる低声で、わずか答えた。

「あたりをはばかりる」様子から、その話題がタブーとされている、もしくは、誰かに話している場面を目撃されると連行等の危害を加え

られる可能性があるのではないかと考えられる。どちらにしる、住民は怯えている。

人を信ずる事ができぬというのです。

「できぬ」とあり、「信じぬ」と比べると、信じようと思っても信じる事ができないということが分かる。王は、人間不信に陥っている。誰かにひどい裏切り方をされたことが想像できる。

このごろは、臣下の心をもお疑いになり、少しく派手な暮らしをしている者には、人質一人ずつ差し出すことを命じております。

「このごろは」とあることから、以前に増して、王の人を疑う気持ちが強くなっていることがわかる。

聞いて、メロスは激怒した。「あきれた王だ。生かしておけぬ。」

「生かしておけ」ないくらいの怒りが、メロスの中に湧き上がってきている。

買い物を背負ったままで、のそのそ王城に入っていくた。

メロスの後先を考えないような性格が読み取れる。「買い物を背負ったままで」から、買い物をしていことやセリヌンティウスに会いに行くことも忘れるほど怒り心頭していることがわかる。それほど、一刻も早く王を糾弾したかったのだろう。

「町を暴君の手から救うのだ。」とメロスは悪びれずに答えた。

「悪びれず」から、メロスは今の自分の行いは間違っていないと考

えている。

「おまえがか？」王は、憫笑した。

「憫笑した」から、王にとってメロスという正義感の塊のような人物が哀れで仕方がない。

「言うな！」とメロスは、いきりたって反駁した。

「いきりたって」から、メロスはかなり興奮している様子であることがわかる。メロスにとって、「人を疑うこと」は、悪である。

「疑うのが正当の心構えなのだ」と、わしに教えてくれたのは、おまえたちだ。

「おまえたちだ。」から、王と民の間で何かトラブルがあったことが予想できる。王の人間不信は、その件が原因である。

「わしだって、平和を望んでいるのだが。」

王は疑いたくて人を疑っているのではない。本来は王も人を信じたのである。

「ああ、王はりこうだ。」

メロスの心の内がわかったような気である王を皮肉っている。

たった一人の妹に、亭主をもたせてやりたいのです。

妹の結婚式に参加できないことは、心残りである。妹のことを思い出し、先ほどの興奮状態から、幾分冷静になっていることが、急に敬

語になっていることからわかる。

三日のうちに、私は村で結婚式を挙げさせ、必ず、ここへ帰って来ます。

妹の結婚式に参加できないことは、心残りである。妹のことを思い出し、先ほどの興奮状態から、幾分冷静になっていることが、急に敬語になっていることからわかる。

わたしが逃げてしまつて、三日目の日暮れまで、ここに帰つてこなかったら、あの友人を絞め殺してください。

セリヌンティウスに全く承諾を得ていないにもかかわらず、約束を破ったら殺すよう言い切っているあたりから、彼らの友情の強さがうかがえる。「絞め殺す」というように殺し方を指定しているが、そもそもメロスは「磔」になるはずだった。なのにもかかわらず、絞め殺すように言っているのはなぜか。せめて苦しむ時間を短くしてやりたいという配慮なのだろうか。そもそもこの時点でメロスは三日以内に帰つてくる自信があつたのだから、そこまで気を遣わなくても良かったはずだ。やはりこれは、メロスの焦りではないだろうか。

人は、これだから信じられぬと、わしは悲しい顔して、その身代りの男を磔刑に処してやるのだ。

「磔刑」とあり、メロスの要望である「絞殺」は全く受け入れていない。メロスが帰つてこないことを望んでいる。

メロスはくやししく、じだんだ踏んだ。

王の言動に腹を立てている。一方で残念に思っている。どこまでも

人を信じようとしないう王に対して、もどかしい気持ちを抱いている。だがしかし、初めて会つたメロスのことをそうやすやすと王が信じるはずはない。これ以上何を言つても無駄であると感している。

竹馬の友、セリヌンティウスは、深夜、王城に召された。

深夜になつてようやくセリヌンティウスが王城に召される。「竹馬の友」とは幼いころからの友人、親友という意味である。それまで、メロスはどうしていたのか描かれていないし、セリヌンティウスもなぜ深夜まで王城に來なかつたのかわからない。メロスはセリヌンティウスの住む場所も伝えているのに、なぜこんなに時間がかかつてしまったのだろうか。

メロスはその夜、一睡もせず十里の道を急ぎに急いで、村へ到着したのは明るる日の午前、日は既に高く昇つて、村人たちは野に出て仕事を始めていた。

「十里の道」とあるので、王城とメロスの村との間の距離が明確になる。また、「急ぎに急いで」とあり、夜通し走つてさらに日が高く昇るころまで一睡もせずに全力で走らないと着かない距離であることがわかる。村人たちは野に出て仕事をしている。野に出ているので農業や放牧業だ。時期は初夏である。北半球の初夏であるから、おそらく日照時間は長いと推測される。それでも一睡もせずに急ぎに急がないと着かない距離である。

婿の牧人は驚き、それはいけない、こちらにはまだなんの支度もできていない、ぶどうの季節まで待つてくれ、と答えた。

冒頭において、メロスは妹の結婚式のためにシラクスの街にやってきたと記述があった。結婚式が近いという記述もあった。ところが、ここでは婿の牧人が非常に驚いていて、まだ結婚の準備に時間がかかるといふ。しかも、「ぶどうの季節」までかかるという。ぶどうの季節は秋である。物語で描かれているのは「初夏」である。いつまで待たせる気だったのか。メロスに対する困難のひとつとして作者が書いたのだろう。

祝宴に列席していた村人たちは、なにか不吉なものを感じたが、それでも、めいめい気持を引き立て、狭い家の中で、むんむん蒸し暑いのもこらえ、陽気に歌を歌い、手を打った。

急に決まった結婚式であるが、村の人たちはしつかりと参加している。やはり結婚式は近いうちに行く手はずだったのではないか。だが、「狭い家」の中に納まる程度の人数である。雨に不吉なものを感じていても、「めいめい」とあり、一人ひとりがそれを感じさせないように盛り上げているあたり、村人たちの暖かさを感じる。想像だが、両親のないメロスとその妹は、村の人たちにとって自分の子どものようにかわいかったのかもしれない。

このよい人たちと生涯暮らしていきたいと願ったが、今は、自分の体で、自分のものではない。

「このよい人たち」とは、もちろん村人たちのことである。妹や婿も含まれているだろう。メロスは自分の生活に未練を感じている。と同時に、自分の置かれている状況を冷静に見つめなおし、死の覚悟をかためている。

メロスほどの男にも、やはり未練の情というものはある。

メロスほどの男とあるが、ここではメロスほど「信念を貫く」男という意味ではなからうか。未練とは、村への未練だけではなく「生きること」への未練も含まれると考えられる。何かと理由をつけて出発を遅らせている。

おまえの兄は、たぶん偉い男なのだから、おまえもその誇りをもっていろ。

嘘をつくことをこの世で一番嫌いなものとしているメロスは、「市に用事を残してきた」として、妹に自分が死ぬことを隠している。妹や家族を捨てても、信念を貫くことはこの上なく尊いことだということとを頭では考えているが、それが果たしてもっとも偉いことであるのか自信を持っては言えず、あえて「たぶん」という表現を使うことで、気持ちを濁している。

もう一つ、メロスの弟になったことを誇ってくれ。

「くれ」とあり、婿にもメロスを誇ってほしいと求めている。これまでのメロスの行動や、今からメロスが行うことは尊いことなのだと思っている。「もう一つ」とあるので直前の「娘や羊を託す」という言葉も合わせて、いわゆる「遺言」となる言葉である。

さて、メロスは、ぶるんと両腕を大きく振って、雨中、矢のごとく走り出た。

「さて」という転換の接続詞が使われていることから、場面が大きい。

く変わることを予想させる。メロスの出発をドラマチックに表現している。「雨中」と「晴天のもと」だと、やはり「雨中」の方が勇ましく感じる。昨夜は不吉に感じた雨も、ここではメロスの勇者像を作る手助けをしているといえる。「ぶるんと両腕を大きく振って」とは、すなわち走るときの様子を表している。「矢のごとく」から、かなりのスピードであったことが伺える。

満身の力を腕に込めて、押し寄せ渦巻き引きずる流れを、なんのこれしきとかき分けかき分け、獅子奮迅の人の子の姿には神も哀れと思っただか、ついに憐愍を垂れてくれた。

「押し寄せ渦巻き引きずる流れ」と誇張気味に描写することで川の流れの激しさが目に浮かぶようである。「かき分けかき分け」と繰り返し返すことでメロスの必死さや場面の臨場感が出る。憐憫を「垂れて」とは、下の方に向けているという事。神が主語だからであろう。

おまえは、希代の不信の人間、まさしく王の思うつぼだぞと自分をしかつてみるのだが、全身なえて、もはや芋虫ほどにも前進かなわぬ。

自分を奮い立たせようとしてみるが、たまりにたまった疲労で全く動けない。また、「動けない」ではなく「前進かなわぬ」といつていることから、「前に進みたい」という気持ち伝わってくる。

もう、どうでもいいという、勇者に不似合いなふてくされた根性が、心の隅に巣くった。

「巣くう」ということで、「嫌なもの」がすみついたことを強調している。精神もやられてしまった。

わたしは不信の徒ではない。

さきほど、「このままでは希代の不信の人間になってしまふぞ」と自分を叱っていたところなのに、今度は自分を擁護し始める。言っていることが無茶苦茶になり始め、精神がやられてしまったことが見て取れる。

わたしは、よくよく不幸な男だ。

「よくよく」とは程度がはなはだしいさまのこと。これまで、メロスが不幸だと読者が思う場面は川が氾濫したことがらしいしかない。それ以外はメロスの自業自得なところが多い。それでもメロスは自分をものすごく不幸な男だという。メロスは弱い人間だ。

一度だって、暗い疑惑の雲を、お互い胸に宿したことはなかった。

「暗い疑惑の雲」とあるが、暗い、疑惑、雲という言葉はどれも不吉な感じを与える。

それを思えば、たまらない。

「たまらない」とあるが、なにがたまらないのか。それは恐らく、信じ続けてくれているセリヌンティウスを死なせてしまう事であろう。

友と友の間の信実は、この世でいちばん誇るべき宝なのだからな。

「だからな」とあるので、呼び掛けている。自分に向かって言葉を投げかけているのだろう。

信じてくれ!

「信じてくれ!」に「!」がついている。心の中で叫んでいるのだろう。時間通り戻ってこないメロスをセリヌンティウスはどう思うのだろうか。メロスを恨みながら死んでいくのだろうか。

わたしだからできたのだよ。

仮にそうだとしても、言わないほうがカッコいい。それをあえて記すことで、太宰はメロスを少しダメなやつに仕立て上げている。

王は、独り合点してわたしを笑い、そうしてこともなくわたしを放免するだろう。

約束を守れなかった時のことをかなり具体的に想像している。「独り合点」とあるので、「本当は違うのに」というメロスの悔しさが伝わってくる。

いや、それもわたしの、独りよがりか?

「それ」が指すものは「一緒に死ぬ」ことであろう。メロスの勝手な解釈が目立つ。

正義だの、信実だの、愛だの、考えてみればくだらない。

この作品のテーマを揺るがす衝撃の発言。心も体もまいつてしまつて、つい出てしまった言葉であろう。本当はそう思っていない。

ほうと長いため息が出て、夢から覚めたような気がした。

「ほうと長いため息が出た」とあり、メロスからは先ほどまでとは

違い、落ち着いた様子、余裕のある態度がうかがえる。「夢から覚めたような気がした」とあるので水を飲むまではとうとうとしていたのだろう。ここでの「夢」はメロスがまどろんで夢を見ていたということではなく、まどろむ前のメロスがとっていた投げやりな態度だと考えられる。

義務遂行の希望である。

義務とは「日没までに町もどつて処刑されること」である。メロスは体が回復して、今からならまだ処刑に間に合う可能性があると考えている。

我が身を殺して、名誉を守る希望である。

「我が身を殺す」とはメロスが処刑されること。名誉とは「嘘をつかずに、約束を破らずに、身代わりの友を助けること」だろう。

斜陽は赤い光を、木々の葉に投じ、葉も枝も燃えるばかりに輝いている。

時間の面ではえば盗賊を倒した後の「午後の灼熱」が夕方にかわりつつあり、徐々に日没が迫ってきていることを表現している。またこの描写の中にメロスの心情が書かれているとすれば、「燃えるばかり」という言葉が、メロスが希望を持ち、モチベーションが上がってきている様子を表していると読むこともできる。

走れ!メロス。

メロスが自分を叱咤激励して再び走り出している。ここから先、刑場につくまでメロスは走ることをやめない。

愛と誠の力を、今こそ知らせてやるがよい。

「知らせてやるがよい」の対象は王である。メロスは日没までに刑場に着くことで、王に「愛（友との友情）と誠（正直であること）の力」をわからせようとしている。「愛と誠の力」とは「友との約束を守ること」「人を信じること」である。

「いや、まだ日は沈まぬ。」

まだ日没になっていないから、セリヌンティウスが直ちに死刑になることはない、と言いたい。同時にまだ日没になっていないからセリヌンティウスを助けられる。だから走るのだ、というふうにもよめる。

メロスは胸の張り裂ける思いで、赤く大きい夕日ばかりを見つめていた。

まだ間にあうとは思いつつも、セリヌンティウスに危機が訪れていることを実際に聞いて「胸の張り裂ける思い」がしている。「夕陽ばかり見つめていた」のはまだ日が沈んでいないことを確認するためのなにかもしれない。「赤く」「大きい」「夕日」これらのすべてが日没までに残されている時間の少なさをよくあらわしている。

それだから、走るのだ。

セリヌンティウスがメロスが戻って来ることを強く信じているから、自分は走るのだ、ということ。

信じられているから走るのだ。

前の文と重複しているから、より明確に、強調するために書いてあ

る。信じられているから走るといふことは、メロスがセリヌンティウスの信頼に応えるために走っていることになる。

間に合う間に合わぬは問題でないのだ。

ここでいう間に合うというのは日没までに刑場に着くこと。前文からの繋がりを考えると、信じられているから走っているという理由に比べたら、間に合うため（＝王との約束を守るため）に走っているという理由は比べものにならないということ。

人の命も問題ではないのだ。

「人の命」、つまりセリヌンティウスの命。ここではセリヌンティウスを救うこと。先ほどと同じで、信じられているから走っているという理由に比べたら、セリヌンティウスを救うために走っているという理由は比べ物にならないということ。

わたしは、なんだか、もっと恐ろしく大きいもののために走っているのだ。

「恐ろしく大きいもの」とは「恐ろしくて、大きいもの」ではなく副詞的な意味合いで「物事の程度がはなはだしい」ことを表している。それに加えて「もっと」とあるので、メロスは前述した王との約束を守ることに、セリヌンティウスを救うことよりも、信じられているから走る、信頼に応えるために走るといふことをいっそう強調している。

何一つ考えていない。

「何一つ」とあり、メロスは走ることに集中しているということだ

ろう。

ただ、わけのわからぬ大きな力に引きずられて走った。

「わけのわからぬ大きな力」が具体的に何を指すのかは記述がないのでわからない。ただ、直前の会話から考えると、大きな力となりうるのはメロスがセリヌンティウスに信じられていくから走っている、信頼に応えるために走っているという部分だろうか。ただ、直前の「メロスの頭は、からっぽだ。何一つ考えていない。」という記述から考えると、メロスは頭で考えて走っているわけではないようだ。さらに「ひきずられる」とあるので少なくともその力はメロスの頭の外側にあることになる。

間に合った。

あつかりと書くことで読者を安心させている。

「待て。その人を殺してはならぬ。メロスが帰って来た。約束のとおり、今、帰って来た。」と、大声で刑場の群衆にむかって叫んだつもりであったが、のどがつぶれてしゃがれた声がかすかに出たばかり、群衆は、一人として彼の到着に気がつかない。

先ほどの安心とは打って変わって、誰もメロスの存在に気付かないことで読者を再び不安にさせる。しかし「殺してはならぬ。」とあるからセリヌンティウスがまだ生きていること、それをメロスが確認できたことはわかる。群衆は誰一人気付かないということは群衆が磔台に集中していたことだから、まさにもうセリヌンティウスが処刑されようとしていることがわかる。

君がもしわたしを殴ってくれなかったら、わたしは君と抱擁する資格さえないのだ。殴れ。

「資格」がないのはメロスが盗賊を倒した後にセリヌンティウスのことを裏切ろうと考えてしまったから。殴られることで、その報いを受けようとしている。二人にとって抱擁は友とするものである。

ありがとう、友よ。

二人はお互いを疑ったこともあったが、最終的には信頼に応えた。そのことに礼を言っている。

暴君ディオニス、群衆の背後から二人のさまをまじまじと見つめていたが、やがて静かに二人に近づき、顔を赤らめて、こう言った。

群衆の背後から来た、ということとはもとからメロスが来るとは思っていないのが分かる。「まじまじ」から、王が二人の姿に集中していることが分かる。「あからめて」は後の発言や行動を考えると、恥ずかしいというよりは（いままでの自分を恥じている気持ちはあるかもしれないが）、二人の姿に感動したから「あからめた」のではないだろうか。

おまえらは、わしの心に勝ったのだ。

「わしの心」とは「人は私欲で動き、疑ってかからなければならぬ、信じられない」という考え。「おまえら」から、王は「約束を守るができる」ことではなく「お互いに相手を信頼できる関係である」と言うところに感銘をうけたのではないか。

どうか、わしの願いを聞き入れて、おまえらの仲間の一人にしてほしい。

「おまえらの仲間」という表現から、王は人を信じようとするだけでなく、信じられる人物になりたいと願っていることが分かる。

万歳、王様万歳。

民衆は王が暴君をやめ聖君になろうとしている姿に感動している。

メロスは、まごついた。

メロスは自分が裸になっていることに全く気が付いておらず、なぜマントをささげられたのかわかっていない。

勇者は、ひどく赤面した。

「勇者」とはメロスのこと。「勇者」が「赤面した」と書くことでメロスが天晴な人物でありながら、人間味を持つキャラクターとして書かれている。「勇者」とあるのでメロスが見事に暴君の心を倒した、勇気ある人になったことが分かる。

三 考察

(一) シラー『人質』との相違点について

フリードリヒ・シラー「人質」(小栗孝則訳、『新編シラー詩抄』、改造文庫、一九三七年)と「走れメロス」との比較を行う。

「走れメロス」では描写が非常に具体的である。冒頭の場面、結婚式の場面など例を挙げればきりが無い。では、描写を具体的にするこ

とでどのような効果もたらされるのか。それは、読者にメロスの心情をよみとらせ、メロスの人間性を理解させるためではないか。そして、「人質」で書かれなかった部分を描くことで、より物語を分かりやすくする効果もあるのではないか。では、この二つの作品の相違点をメロスという人物に絞ってみていこうと思う。

冒頭の場面で、シラーはメロスを「のんきなもの」だとは記していない。暴君ディオニスのところに「忍び寄っている」ことから、どこか王殺害の計画があったように思える。対して、「走れメロス」では、突発的に王殺害を思いつき、暴君ディオニスのところにたどり着くとなく、あえなく警吏に捕縛される。この二つの作品の冒頭で、メロスという人物への印象が全く異なるといえる。

また、メロスが大きく異なるのは、王城へと走る場面である。降りかかる困難は特に違いはないが、途中でメロスが疲れ果てて倒れてしまう場面が、大きく異なる。「人質」におけるメロスは、自分に対して叱咤激励しからない。「ここまできて、疲れ切って動けなくなるとは愛する友は私のために死なねばならぬのか?」と、疲れ切った状態にあっても、友であるセリヌンティウスのことを思いやっている。ここで「あきらめ」は一切ない。そして、清水を飲んだ彼はあっさりと元氣を取り戻して、再び走り始める。この間わずか六行だ。対して「走れメロス」ではその数倍にも及ぶ長さで細かく描写されている。そして、メロスはその場面で一度友人の命を救うことをあきらめている。そのすえに深い眠りにについている。ここにメロスの弱さが描き出されると感じられる。

(二) 作品のテーマについて

ずばりこの作品は「走れ！メロス」である。作者はメロスを、最強の勇者として描かず、どこか人間的な弱さを持ち合わせたものとして描いた。確かに超人的な能力で、荒れ狂う川を越えたり、山賊をなぎ倒したりと、ヒーローとしての一面を見せている。だが、「人質」にはなかった、メロスの「あきらめ」を描くことで、メロスが一気に人間的になる。こうすることで、読者が、メロスとともに苦しみ、かつメロスを応援したい気持ちになっていく。友の命を救うことをあきらめ、ひれ伏したメロスを叱咤激励し、信実は決して妄想ではないということとを証明してほしくなるのである。メロスに対して、人間として抱いて当然である「死への恐怖」や「自らの信念に対する疑惑」を抱かせることにより、メロスをより読者に近い存在にしているのだ。

描写の中には「人の心は、あてにならない」を中心とした王の発言や、「正義だの、愛だの、考えてみれば、くだらない」というようなメロスの発言がある。これらの発言はただ単に登場人物の思考や人間味を表現しているだけではなく、作者、太宰治そのものの心情も表現していると考えられる。このように考えるとき、太宰の生活や性格を考えて彼に一番近い人物は王であろう。また、メロスの弱気な発言やセリヌンティウスを裏切ってしまったかと思う考えも太宰の考えであるといえるだろう。現実世界で人を信じることができなくなったり、人の信頼にこたえようとする太宰。そんな彼が話の世界だけでも書いたのが「走れメロス」ではないだろうか。王と太宰は本当はメロスに走ってきてほしいのだ、たとえどんな困難があったとしても。そして、そこから何かを信じてみたいのだ。それは「信実とは、決して空虚な妄想ではなかった」という一文に尽きるのではないか。

